

# 海軍 陸上部隊

あの日あのととき

南溟の国ジャワの思い出

石川県 松田 芳雄

明るい夏の陽射しと、暑い太陽の照りつける七月を迎えるたびに、過ぎし遠い舞鶴海兵団での訓練の一こま一こまから、終戦、そして復員にいたる海軍軍人として歩いた過程が昨日のようによみがえってきます。それはこれまでの自分の人生の中で最も光り輝いていたときであり、誇りに思っているからに他ならないからだろうと思う。

桜のマークを指して、横須賀通信学校第六期電測術練習生（哨戒）として入校、学校卒業時に

配属先が伝達された。南方方面を希望した関係もあり、第三補充部付を命ずという辞令で嬉しく思った。一方、呉鎮守府出身者のほとんどが、戦艦「大和」をはじめ重巡（重巡洋艦）級への乗り組みの辞令を受けるたびに、会場にどよめきが起こり、羨望の気持ちと同時に後発である舞鶴鎮守府出身の悲哀を感じました。

第三補充部の勤務地はジャワ島のスラバヤであることが後で分かったのですが、それまで南方基地だということのみで、いまだ見ない任地をいろいろ想像しながら舞鶴海兵団警備隊に仮入隊したものです。

そんな中。十一月十三日、門司港から、いよいよ出航の知らせが入り、衣類をはじめ身の回りの

品を整理し、舞鶴を後にして門司港に向かったのです。

当時としては、大船団の部類に入ると思うが、軍人、軍属を乗せた艦船は三列縦隊で、九隻、それに護衛空母一隻、駆逐艦二隻からなる船団が、十一月十三日に門司港を出港しました。

昭南港まで一カ月を要しましたが途中、我が乗船の右舷を航行中の陸軍を主体とする部隊を乗せた輸送空母は敵潜水艦の雷撃を受けて火災炎上、轟沈、その空母の護衛機の一機は着艦ミスで沈没し、尊い犠牲となりました。

その後、海南島、台湾の高雄港などに寄航して水及び食料を補給する。ここでは南十字星をはつきり眺めることができ、南方に来たことを実感できます。誰かがジョホール水道だといいましたが、全く波一つない湖面のようで、両岸にマングローブの林が続く中を進み、やがて昭南港へ到着、ここでジャワ行きの船便が発航するまで仮入隊となりました。

ここでは砲台の作業や、威風堂々と港に浮かぶ、初めて見るような重巡「足柄」「羽黒」と思われる艦の糧秣搭載の作業を行いました。

昭南港よりジャカルタ港へは「堇丸」<sup>すみれまる</sup>という、当時、瀬戸内海の客船から徴用されたと思われる客船に乗船、バンカ海峡を無事通り、ジャカルタ港に到着しました。

ジャカルタからスラバヤまでは汽車輸送である。座席は固い板張りであるが、卓付でした。ブレーキは手動で、現地の職員が車両のデッキで、下り坂に向かうとき、手回しで制動するものです。

十二月三十一日夕刻、任地スラバヤ上陸、警備隊第三分隊に到着する。この部隊へは二十〜三十人の新入り仲間がいたと思うが、予期せぬ歓待を受けました。そして「精神訓話」と「前に支え」である。ここへ着ても海軍の伝統を感じましたが、ジャワの蚊には悩まされました。

日本を出たのが昭和十九（一九四四）年十一月十三日、任地第二十一特別根拠地隊第三補充部に

到着したのは十二月三十一日の夕刻でした。五十人ばかりの私たち、新入りは、即整列、蚊の攻撃を受けながらの有り難い説教と「前に支え」の気合のこもった手厚いもてなしで迎えられ、任地の第一歩が始まりました。

前線では、このような接待がないものと楽観していたことが見事に覆されました。兵舎へ入って間もなく空襲警報発令、どうしていいのか皆目見当がつかない。先任兵から渡された鉄帽、銃、帯剣を見て吃驚、何とオランダ軍のものです。これを身に付け先任兵の指示に従うのみで、空襲は三機、被害は軽微であったと、後で知りました。

明ければ昭和二十年元旦、南方でも雑煮と正月のご馳走が出たことに、奇異な感じを持ちながらも有り難く思いました。さらに奇異なのは、食器はみな椰子の実をくりぬいたものでした。糸底無しですからコロコロ動き、つかみようがなく面食らいました。さらに先任兵たちがしゃべっていることばに異語が混じり、言っていることがピンと

こない。現地インドネシア語が自然に常用化されているのです。

元日でもあり、下士官たちは集まり、酒を飲んでいる。よく世話焼きの一人の先任兵は、海軍用語の「銀蠅<sup>ぎんばえ</sup>」仕込みと思われる鰹節を、昨夜見たあのオランダ軍の蛮刀じみた帯剣でゴシゴシ削り出しました。何気なく見とれていると「お前、大根を銀蠅してこい」とのご下命である。

昨夜到着した翌日の今朝では、八方暗闇ごときではあっても、元日に大根泥棒とは殺生なことから、一瞬恨みに思いつつも、ナニクソと外へ飛び出しましたが目当ての場所は不明、それでもついに命令を達成し面目を保つことが出来ました。

ここ第二十一根拠地隊の我が隊は、スラバヤ陸警隊内にあり、鬼の陸警隊の異名をとるくらい、ここには目玉の光る分隊長ほかの数人の下士官がいて、訓練の厳しさは抜群でした。対照的に兵舎は南国を象徴するような赤瓦、白壁の建物で、大小多くの広葉樹の生い茂る中に点在する様はおと

ぎの国を思わせる趣がありました。

正月も三日もたったところか、分隊本部から、ただ一人呼び出しを受け、軍港に入港中の艦に転任の受令となり、即刻、出発。先任下士官が送ることを聞き一安心ではありましたが、初めての艦船勤務を思うと不安は募るばかりでした。

「当たって砕ける」「案ずるより産むが易し」というとおり、転勤は第二特殊掃海艇で、乗組員は艇長、分隊長、先任下士官、通信長以下四十四人で、主としてボルネオ、セレベス島など付近の基地への物資輸送の船団護衛が任務でした。甲板下士官として艇内一の責任者でもあった兵曹に眼をかけられていました。

二カ月余で三日熱マラリヤに罹り退艇、スラバヤ市ダルモにある第一〇二海軍病院に入院しました。この間、任務中にこの艇が、ある島に停泊中、敵潜水艦の攻撃を受け、先任下士官ほか半数の乗組員が戦死したことを後で知りました。

艇の任務は、船団の護衛で、時々水上偵察機の

敵潜水艦発見の知らせで、爆雷投下も行いました。

退院後は元の陸警隊帰属となりました。

この陸警隊の兵たちは入れ替わり、見知らぬ者ばかりとなりましたが、主な先輩は元気で懐かしそうに笑顔で迎えてくれました。幸いに、しばらくして見張り所勤務となり、ここはスラバヤ東部の市電終点より自動車で二、三分の丘陵地にある「シ〇一見張り所」でした。

電波探知機と見張り所を持ち、要員四十余人、内兵補数人で哨戒に当たっていました。付近には陸軍の部隊の大きな施設が見られ、また、現地の部落も点在しているのどかな田園地帯で、見張所も外部から容易に入入りできる状態でした。三代の当直制で非番の昼間は主に防空壕構築作業で同じ年代の兵補などとも日本語、インドネシア語のチャンポンで談笑しながら、和気あいあいで、当直勤務や作業に当たりました。この見張り所勤務も、そう長くは続きませんでした。

日に日に戦況は不利となり、ドイツ降服の五月

以降、敵潜水艦の跳梁は著しくなり、出港する艦船の多くは彼らの好餌にされます。さらに制空権もなくなると、いよいよ隣の島ボルネオに敵部隊が上陸し、ジャワ島も彼らの指呼のうちとなるに及んで、陸警隊にも帰投を命ぜられて鬼の陸警隊へ帰り、陸戦の訓練に明け暮れる毎日となりました。

対戦軍攻撃訓練が日中に行われれば、夜は斬り込み隊の訓練と、敵の上陸を想定しての猛訓練でした。

折りしも水上特攻隊の募集があり、私をはじめ三十人ほどの同年代の兵が進んでこれに応募しました。いよいよ我々も海軍軍人として死の場所定まれりと、明日から特攻隊の戦列参加に向かおうとしたとき、終戦の報が入りました。全員声なしでした。

明日から一体どうなるのだろう。やり場のない気持ちと、身体力が抜け落ちた虚脱感。「国破れて山河あり」故国に思いを馳せつつ日本の将来

を思いました。

終戦後、インドネシアは独立のため、日本軍部と、どのような協定がなされたか知る由もありませんが、武装解除は連合軍が上陸するまでに終わり、武器はすべてインドネシア軍に引き継がれました。

その間、海軍工作隊がスラバヤから数十キロあると思われるプシヨン村に三万人の大部隊を収容する部落を作っていました。ここへ引越し、海の兵は、毎日山の開墾作業と、甘藷の作付け、夜の野豚からの畑の守りの作業に従事することになりました。

ここでは既に戦争はなく、祖国へ帰る日まで何年たとうが、自分の命を保つという目的に代わりました。落ち着くと、いろいろな作業面で専門的に区分が行われました。

味噌・醤油を作る班、芸能を業とする班、などである。特に芸能班は毎週末、夕食後、部隊の広場に設けられた舞台の寄席は、大変な人気であり、

楽しみでした。

また、時折、分隊対抗の運動会、相撲大会、バレー大会などが催され、復員に至る日まで、しばし平和の日々をジャワの山峡で送りました。

門司を出港して二カ月近くを要した任地、ジャワ島のスラバヤは、幾多の波濤を乗り越えて不安の航海の末、ようやくたどり着いた南溟なんめいの地です。大海原の中に、自然の豊かな雄大な地があることの驚異と感激、やがて、離れがたき懐かしさとなり、今もなお、私の脳裏を巡る、その情景は尽きません。

それにしても、このスラバヤの緑多き豊かな風景は何の変化もなく、今も太陽に映えています。六十有余年になろうとする今日も、夏が近づくにつれよみがえる思い出の一コマであり、同時に、靖国の華と散り逝った戦友の顔が浮かび、一層鎮魂の情が募り、祈りを捧げるのであります。

## 【解 説】

筆者は、昭和三年八月、石川県鳳至郡門前町（輪島市）生まれ、曾祖母、祖父、父母、兄弟二人、妹の八人の家族で、家は小作農業で、父は主に出稼ぎに出ていた。

昭和十七年十月、小学校高等科二年のとき海軍に志願し、十二月ごろに受験、合格。そして舞鶴海兵団に入団したのは昭和十八年七月一日、第二期海軍練習兵、いわゆる特年兵の兵科分隊所属となる。

昭和十九年五月の卒業まで、軍事教育と旧制中学三年程度の一般普通学の教育を受け、卒業と同時に第六期電測術練習生として横須賀市久里浜の海軍通信学校に入校、途中から新設の藤沢電測学校に移動して教育を受けた。

特年兵教育で感じたこととして、筆者は「現在の中学三年次に軍隊に入隊したことになるが、現在の少年に比べて身体的には小さく、軍事訓練、カッター漕ぎなど大変厳しいものだと思います。

それでも当時の教えて頂いた種々の教えは今もあり難く思っております。洗濯の仕方、縫い物の仕方、掃除の仕方等に始まり、教班長といわれる方の指導は、今なお海軍ならではと思っております。そして「スマートで目先が利いて、几帳面、負けじ魂、これぞ海軍」で、また何事も「五分前」とこれらの精神は、今もって実行している」といいます。

電測学校を卒業すると同時に配属先が決まり、第二十一根拠地隊所属の第三補充部付きとなり、昭和十九年十一月十三日、門司港から出発までの期間は舞鶴警備隊に所属して、毎日海兵团近くの愛宕山下の防空壕掘に従事し、その後の任地ジャワでの思い出を体験記として記録されております。

特に昭和十八年、海軍を志願された当時の世相は、国内は戦時一色、小学校でも講堂の正面の大きな垂れ幕には「挙国一致」「尽忠報国」などが書かれ、運動会でも隊列を組み、分列行進や剣道の型、騎馬戦が行われ、「一億一心、火の玉」の

状況であつたことを語られた。

こんな中で海軍に志願する者こそ、男の中の男、家の名誉ともいわれ、今でも母が涙一滴も見せず、笑顔で入団に送り出してくれたことが不思議に思われると語る。

教育の偉大さと怖さを感じつつ、一方、軍事訓練と同時に中学生に劣らぬ一般普通学科を教え、文武両道の教育を施し、海軍の将来の幹部養成を目指した特年兵制度で受けた教養が、懐かしく、しかも戦後に生きた人間形成の背骨としあつたことを語られた。